

共に差別をなくす取組を

部落解放同盟宮崎県連合会 仮屋龍一 さん



仮屋さんの一言ひとことに思いが凝集されていた

全研の初日全体会で、部落解放同盟宮崎県連の仮屋龍一さんが「共に差別をなくす取組を」と題した地元報告をおこなった。講演では、厳しい部落差別の現実のなかで支部が結成され、解放運動に出会うなかで「ふるさと」を誇りに思えるようになり、親やムラの人たちへの思いが語られた。紹介するのは、仮屋さんの地元報告の一部を(文責・編集者)

今が立ち上がる時

私は延岡市の部落に生まれ育った。私のムラには、と場、野犬処理場、火葬場があり、周辺地域からは強烈な差別を受ける日々だった。

1976年に支部を結成するときは、ムラのばあちゃん、じいちゃんたちが一番反対した。

その背景には、過去にこれまでいくらか差別を訴えても誰も聞いてくれなかった歴史があったからだ。

支部が結成されるまでは、宮崎県行政は「みどり」と太陽の国、宮崎には差別は

ない」と、行政はまったく対応しない過去があったからだ。

その反対を若者がおしきる形で支部を結成した。支部が結成され、一番最初の要求は火葬場を移転し、その空き地を子どもたちの遊び場にすることだった。

ムラには、野犬処理場や火葬場など人が嫌がる施設が多かった。そのため強烈な偏見により、部落が差別され、忌避され続けた。だから今

ていた自分だった。しかし、解放運動に関わるなかで、そんな「差別を受け入れていた」自分が少しずつ変わってきた。

それまでは、と場や火葬場があるから差別をされていると思っていた。でも、ムラの人は、と場で牛や豚などを決して「殺す」とは言わなかった。「わる」とか「おとす」とか。肉だけでなく「牛の鳴き声以外は一切

全体会では、5000人が一同に講演を聞いた



度は「人が来たがる」施設を求めた。

しかし、火葬場を移転し、その跡地に立派なグラウンドができて、も地区外の人は誰も利用しなかった。子どもたちも「あのグラウンドでケガをしたら伝染病になる」

に無駄にしない」と言われてきた。骨は骨粉肥料として使っていた。皮はグローブや革製品に使っていた。毎年ある「畜魂祭」では、食肉産業に関わる人が、1年間の命に感謝し、手を合わせ頭を下げている姿があった。

正しく部落問題を知るなかでそんな、ムラのと場や火葬場のことを「嫌っていた」自分が情けなく思いはじめた。

「INS」をめぐり

大分の大学に進学した。大学には九州各地から、いろんな友だちが来ていた。酒を飲みながら、自分たちの故郷のことや、生い立ちを語りあう中で、自分はムラのことを話せば、この場におれなくなると「ケモノのような鋭さで」故郷を隠した。

大学に進学し初めて部落を離れ、自分にとっての「楽しい懐かしいふるさと」と「ケモノのような鋭さで隠すふるさと」の二つのふるさとに

なってしまう。大学卒業後、会計事務所に入社したが、父の借金で退職させられた。

仕事もやめて、ブラブラしているときに、解放運動に誘われた。そして、いろんな集会に参加し、そこで多くのきょうだいと出会った。

そこでは「差別はおかしい」と怒りをもち闘っていた人たちがいた。でも、自分にはそんな熱いものはなく、ただ差別を受け入れ

私の十月十日

母はムラで生まれて、看護師になった。宮崎県内のある町で看護師として働いていた。父と交際が始

まるなかで、母のお腹の中に命が宿り、二人は一緒にいると誓った。でも、父親は猛反対した。

それでも、何度も通ってくる父をムラの人々が励ました。「私のトツキトウカは、まさに差別との闘いだっただけだ」

もし、父と母が、厳しい結婚差別と反対のなかで、さじを投げていたら、自分はこの世に生まれてくることはなかった。

差別は人の命を奪う。でも、差別をなくすことは、命を守り、命を育てていくこと。差別との闘いを、それぞれの生き様と重ねながら、差別のない社会、差別のない人に向かってみんなが近づいていきたい。

「教科書は人権課題の宝庫」⑩

宇部・長生炭坑水没事故の教材化に向けて(3)

山口県同教 事務局 長 松本卓也

宇部市の中でも有数の海底炭坑の一つであった長生炭坑は、鉱山局からも「浅いところは掘るな」といわれ、いまは、それが経営が成り立たず、危険とわかっていながらも浅いところを掘り続けました。

この水没事故で数多くの尊い生命が奪われました。この犠牲者のほとんどが、「募集」という名の強制連行によって、強制労働を強いられた朝鮮人でした。この水没事故の犠牲者は183名から191名と言われていますが、そのうち135名を越える人々が朝鮮人であったことが確認されています。

「中に入って、深い深い所に行ったら、天井から水がもるところがあった。坑道の中にいると、上を通る船の音が、ちようど電話線ではないのである。みたいにはポンポンポンと聞こえてきた。恐ろしかった。」という話が残っている。ほど、海底から浅い所を掘っていました。

1940年頃までに長生炭坑で就労していた人々の多くは、朝鮮から連れてこられた人々でした。所帯をもって納屋で生活していた人々、多くの単身者たちは、飯場の中はよその棟に行くことも禁じられ、職場の坑内作業現場と飯場の間を毎日往復するだけの生活でした。自由に炭坑敷地内を歩くことも禁止されていました。また、強制的に貯金をさせられ、なんとか逃亡を防ごうとしていたことも明らかになっています。

1942年(昭和17年)2月3日午前6時、山口県吉敷郡西岐波村にあった長生炭坑は、坑内現場事務所より150メートルほど離れたところ(海底から25メートル)から異常出水が始まり、午前8時頃水没しました。

水没事故犠牲者に対する弔慰金は、一般の日本人は300円で、朝鮮人は30円だったと言いう人もあり、日本人職員の中には5000円貰った例もあると言われています。長生炭坑水没事故の状況については、一般には事実を知っている人がほとんどいないことを付け加えておきます。

参考文献

「海に沈んだ炭坑」山口武信、
「海がほけた」梶村秀樹



1933年当時の長生炭鉱と2本のピーヤ